



早いもので、今年度も残すところあと1ヶ月となりました。連合会に移り半年が過ぎましたが、すべての加盟組織を回り、また代表者会議や大きな集会や研修を終えて少しずつ全体が見えてきたように感じる。

先週は全国よい仕事研究交流集会2018を2日間併せて1,000人を超える方々の参加をいただき、無事に開催することができた。法制化も進んでいる状況のなか、「いのちと社会に向き合う協同労働・よい仕事とはなにか、その深化・発展のプロセスをみんなで考える」とテーマを掲げて、初日全体会・2日目15分散会に分かれて、深め合った。

内山節さんの講演「ともに生きる世界—いのちと社会を結んで」では、未来はわからなく過去に学ぶしかないが、今の問題意識によって過去の見え方も違うなど、正確に捉えることはできないと。そのなかで内山さんの上野村での生活を通じて感じる、労働と経済と暮らしと文化が一体となった生活の話は非常にわかりやすく、またその関係性のなかに「いのち」があるという話にも共感することができた。私たちが仕事と生活をテーマに協同労働に取り組み、人と人との関係性を結び直し、働くことと暮らすことを結び付けてきたことは、まさに「いのち」の場所をもう一度、自分たちで取り戻す取り組みであることを実感できた。

集会では、すべての現場から“みんなのおうち”居場所づくりに取り組もうと「協同総合福祉拠点」が提起された。仲間、利用者、地域の方々が制度に捉われず誰でも集い、ごちゃまぜの安心した居場所をつくり、自由な発想で地域の課題や自分たちの想いの実現に向かおうと、わくわくするような実践報告がいくつもあった。松本市並柳団地や遠野市いっばいっばの会の発言に見られるように自治会や障がい児の親の会が協同労働に触れ、集い、仕事おこしに向かうなど、地域主体での取り組みが始まっている。一方で制度事業を担う中での行政や委託元からの理不尽な人権を無視する対応もあり、組織として「いのち」を軸としたブレない事業運営に立ち向かわなくてはならない。

2日目のコメンテーターの先生たちが同様の感想を持たれていたが、多様な仲間と共に、多様な地域の方も一緒に進めることは、非常に難しく、悩み葛藤やぶつかり合いもある。しかしそこを逃げずに向き合うことで、或いは困難を超えて共に作ることで関係性は築かれ、協同労働はそこを大事にしている。協同労働の法制化も、話し合い、住民主体、仕事おこし、地域づくりを通じた、共生の社会をつくることに本質があるように感じる。